



Education ExChange Community

高 館 千 枝 子

〒028-3603

岩手県紫波郡矢巾町西徳田 7-7

Tel/fax : (81) 019-697-3851

Mail:tchieko@cocoa.ocn.ne.jp

東日本大震災と私の一年

—届きたい気持ちを—

[1] 震災の日

2011年3月11日、私は家族で日光東照宮、水戸の偕楽園へのバス旅行に出ていました。私たちは徳川家康の菩提寺であり、世界遺産にも指定されている「日光」を訪問し、建物、彫刻のすばらしさのため息を漏らしながら観光を楽しんでいました。

その時、異常な揺れに襲われました。そこにいた全ての人々が驚きと恐怖、不安に包まれました。樹齢何百年もの杉の木は音をたてて大揺れになびき、お守りを売っている小さなお社は大きく横に揺れていました。中からは巫女さんたちが悲鳴を上げながら飛び出して来ました。私たちはただ恐怖に耐え、揺れが収まるのを待つだけでした。これが、東日本大震災の始まりでした。

同じ岩手県民なのに、内陸部はほとんど被害なし、沿岸地区だけにあれだけの被災者が出ていのに、ただ同情しながらテレビをみてて良い訳がない。

これは大惨事なのだ！日本の歴史に起こって欲しくない未曾有の出来事が起こり、我が岩手の沿岸の人たちが苦しめられているのだ！

人間としてどう行動するべきかを問われているのだ。この惨事が起きた時代に生きた者として、岩手県民として、自分が納得する行動を取らなければ一生、後悔することになる。

しかし「私は何をすべきか？」「何でも良いから何かしなければ」「何が出来るだろうか？」との思いが、頭の中で堂々巡りするばかりでした。

その時、高等学校在職中に担任をしていた唐丹町出身の卒業生の顔が浮かんできました。

[2] 唐丹町出身の卒業生

海に遠い内陸部に育った私は、海に憧れのような気持ちを持って幼少期を過ごしました。そんなことから、唐丹中学校を卒業した山田(旧姓内川)久恵さんの家に、同僚の教員と二人で、一度だけ海水浴をするためにお世話になったことがありました。そのときの楽しかった思い出がよみがえってきました。「あの海岸はどうなってるのだろうか？山田さんのお父さんの船は？お母さんは？住民の皆さんは無事なのだろうか？」と、とめどなく気になり始め、東京にいる山田さんに電話を掛けまし

た。そして漁師であるお父さんは、船が流されたので漁師をやめること、家だけがかろうじて残ったことが救いであることを知りました。

山田さんは、子供の尊喜(とき)ちゃんが障害をもっていたので仕事をやめ、子供の世話に専念していました。そしてその山田さん一家を財政的に支援をしていたのが、唐丹町に住む山田さんの両親でした。その両親が被災者になり、孫の尊喜ちゃんの支援も出来なくなってしまったのです。

それを聞いて、「今が山田さんの助けになる時だ、あの時の感謝に恩返しする時は今をおいてない」と思ったのです。

しかし、身内への支援や親しい人への支援だけで良いのだろうか。沿岸部には数え切れないほどの被災者が、寒い避難所で暮らしているのに、身内だけの支援で済ませるわけにはいかないのではないか。そうだ、卒業生の出身地、唐丹町の子供達も一緒に支援しよう！せめて、義務教育だけでも安心して受けられるように、親の役に立ちたい。子供たちには立派に成長してもらい、岩手の沿岸部を立て直してもらわなくてはならない。これだけの物を失ったのだから、子供たちの将来まで失うような事だけは避けなければならない！未来を託せる子供たちとその親の役にたつことは、これこそ私の心から望む支援方法だと、確信したのです。

[3] 教育支援募金活動プロジェクトの立ち上げ

教育支援募金活動を始めるに当たって中学校の教員をしている親戚から、唐丹小中学校の生徒の人数、住所、電話番号、校長先生の名前を聞き、その情報をもとに、募金趣意書、募金依頼状を作成し、その日の夜中に県内の報道機関にメールをしました。誰にも相談せず、誰の承諾も得ず、一晩で文章を書き、「とにかく早く行動しなければ…、募金するには報道の力が何としても必要！」と、これだけを考え行動を起こしてしまっていました。早速、新聞社2社が報道し、テレビ局1社も「掲示欄」に掲載してくれました。これは本当にありがたいことでした。

それからというものは、趣意書と依頼状をコピーし、すべての友人、知人に手紙やメールを送り続けました。何かしてないと、無力な自分が崩れそうで怖かったので、募金活動のために、しなければならないことを探し、作り、手を、頭を、体を動かし続けるほか、何をやる気も起きませんでした。そうしていると、不思議にも心が安定し、安らかな気持ちになってくるのでした。

楽しみにしていた北歐との交流も、盛岡芸術祭への作品制作も、どうでも良くなりました。行かなければ良い、出さなければいいのだ、と不思議なほど簡単に諦めがつきました。もちろん、自分の楽しみのための出費は、どんなに少額でも、全くする気はおきませんでした。ただ、唐丹を思い、そのために出来ることをして過ごしました。

4月を迎え、新聞を見て募金して下さる人、問い合わせ下さった方が沢山いて、募金額も日々増え、うれしい気持ちでいました。そんな時、唐丹町の内川さんから電話があつて、「近所の人が、『山田さんが新聞に載ってますよ。高館さんという人が募金活動を始めたそうですよ』と言っていますがそうなんですか？」と言うのです。このとき初めてわれに返りました。「そうだった。募金をしてることを唐丹の誰にも話していなかった」と。

内川さんには「募金を始めたけれど、本当に役に立つほどの支援が出来るかわからないので、も

う少し待ってください。見通しがついたら連絡します。」とだけ話し、了解してもらいました。

肝心な学校へ電話しなければと思いました。初めて唐丹中学校の藤館茂校長に事情を電話で伝えた時、先生は「みんな困ってるのに唐丹だけ支援して頂くのは申し訳ないので、募金は釜石教育委員会に寄付して頂きたい」とおっしゃいました。

「私は、学校に寄付するのではありません。学校は行政の力で必ず平等に復旧します。私が募金して集めたお金は子供達の保護者に使ってもらいたいのです。子育て中の若い人たちが失業し、再就職する職場が 1 つもない沿岸で、保護者の方々はどうやって子供たちを育てていけばいいのでしょうか、私は集まったお金を保護者に渡すために募金しています。私の気持ちを保護者の方々に伝えてください。ほかにお願ひできる方はどこにもいないんです。同じことを小学校の校長先生にお伝えして頂くこともお願いします。」

初めて話す方に向かって、しかも校長先生に対し、知らず知らずの内に熱っぽく、思いつくまま、気が済むまで話していました。本当に無礼な態度だったな、と今になって大いに反省しています。

[4]新聞記者に助けられる

唐丹小中学校を初めて訪問した日は 2011 年 4 月 23 日(土)でした。町の中は瓦礫だらけでしたが、春は確実に来ていて、トンネルを囲むように植えられた沢山の桜が満開に咲き誇っていました。桜が満面の笑みを浮かべて被災者を慰めている景色をみて、涙が出てきました。そして、あのにつき海は、何ごともなかったかのように穏やかに群青色に光っていました。

支援金は毎月届ける計画でしたが 4 月に 1 回目を届けた後には残金がほとんどなく、5 月を休み、6 月 16 日に 2 回目の支援金を持って学校を訪問しました。その時、大手新聞社本社の記者さんが釜石を 1 週間の予定で取材に来ていました。これは全く予期しない偶然の出来事でした。

私は、「これは私のために神がくれた好機だ」と感じました。なぜなら、7月の支援金の当てがなく、校長先生には「来月の支援は休ませていただき、次回は 8 月になります」というせりふまで用意しなければならぬ状態だったからです。取材に応じる私は必死でした。被災者の生活状況、心の痛み、岩手県民としての私の思いなど、真剣に訴えました。

「私の募金を依頼した人は 90%は岩手県人なので募金がなかなか集まりません。被災県でない関東、関西、九州の人たちに私の声を届けて欲しいのです。記事は出来る限り大きくして、写真も見出しも特別に大きくし、すぐ目に付きやすいようにしてください」とお願いしました。絶好のチャンスとばかりに、思いを力を含め、気が済むまで必死で訴えました。

これだけの惨事でも、切り一面震災の記事だらけだから、「私の取材は記事にならないだろう。でも、私は話すべきことは一生懸命訴えたのだから」と自分を慰め、半ば、諦めていました。ところが、6 月 27 日(月)夕方頃から、関東地方の方からの電話がしきりに鳴り始め、「新聞の夕刊を見ました。私も支援します」と。「これは大手新聞社の効果だ、ありがとう！」感謝の気持ちがこみ上げ、感動で胸がいっぱいになりました。

教育支援募金プロジェクトは 6 月下旬頃から関東地区を中心にした支援者が増え、毎月支援のめどが見えてきたのです。しかも、7 月から毎月、震災が起きた 11 日に支援総額 50 万円を届けら

れるようになったのです。

当初は保護者への教育支援が目的の募金だったので、「保護者の手元に届けてほしい」と学校にはお願いし、4月分はその通り届けていただきました。5月にPTA総会が開かれ、「私達保護者がお金をいただくと生活費であつという間に消えてしまいます。募金は学校で預かって支払いが必要な子どもの集金に使っていただいた方が助かります」と言う意見が多く出されました。

そのことを6月に支援金を届けに学校を訪問したとき、校長先生からお聞きました。

「学校の口座に振り込んでも何ら問題ない」事が納得できましたので、7月からは1ヶ月50万円を学校と山田尊喜ちゃん支援の口座に振り込んでいます。

この寄付金のおかげで4月からの学校の集金はごくわずかで教育支援募金でほとんど賄ってることです。

「子どもの学校のことは心配せず安心していられるので、それだけでもありがたい」という父母の声を聞いています。親の負担を少なくし、子どもを安心して学校に通わせることができるために、この支援金が役に立っていることはとてもうれしいことですし、それを可能にしてくださった皆さんのご協力にはいくら感謝してもしきれません。

[5] あふれる善意との出会い

支援金は毎月送れないかもしれない、と諦めかけていた私を救ってくれたのは、全国各地の支援者の方々でした。募金はメッセージと共に送られてきました。メッセージには「被災した子供たちを何とか助けたい。そのために一般の募金でなく、目に見えるような形での募金にしたかった。そんな機会を与えてくれてありがとう」という趣旨のことが必ず書かれていました。そうしたメッセージは、インターネットで発行している毎月の通信に載せることが出来、通信の内容も充実してきました。さまざまな色をした善意の糸が絡み合い、それが大きな輪に成長し、いつの間にか虹色に輝き、唐丹の子供たちと結びついて来たのです。2011年11月30日現在の支援者は延べ359名、ほとんどは会ったこともない人ばかりです。ただ、「この大惨事を見過ごしてはいけない、被災された人たちの役に立ちたい、子供は国の宝、その子たちに元気で育てて欲しい」と願う気持ちが大きな輪となっているのです。

会ったこともないのに、お互いの気持ちを打ち明けると、分かり合っている長年の友達のような気持ちになってくるのです。「ありがとうございます」と百万遍言っても言い足りないほどの感謝で、今、私は満ち満ちています。

ここで大切な節目を作った支援者4人について書きたいと思います。

震災4ヶ月目にあたる7月11日、この日は、桜美林大学准教授長谷川(間瀬)恵美氏とゼミの学生を案内し唐丹町を訪問する日になっていました。盛岡駅に迎えに出る前に郵便局で記帳をしたところ、100万円が入金されていました。この方は鎌倉の方で、この日が震災から4ヶ月目にあたることを覚えていてくださり、被災者の苦しみを忘れず、朝一番に振り込んで下さったのです。

お陰で、唐丹中学校に長谷川さんや学生さんを案内して帰るとき、「7月は支援金を送れないと申し上げましたが、今月から毎月、支援金を振り込めるだけの募金がたまりました。震災日の11日

に振り込ませて頂きますので少しでも保護者の負担を軽くしてあげて下さい」。そう校長先生に言えたときのすがすがしく晴れやかな気持ちは忘れることが出来ません。この方は、10月にも「お金は足りていますか」と電話をかけてくださり、「12月に入ったら少し多く送りますから唐丹の人たちに届けて下さい。」と言って下さいました。本当に感謝に耐えません。

[6] エスペラント語エキスパートが協力

7月15日に群馬県の60代の男性から下のようなメールと募金が届きました。

「新聞の記事を読ませて頂きました。私も震災孤児の子供たちを個人的に支援したいと思っていたので、高館さんの取り組みに感動しました。出来る限り募金させていただきます。今は、エスペラント語で震災の報告を全世界に送っています。」

「出来る限りの募金」の言葉に私はとても喜びました。しかし、この方はお金を払い込むだけでなく、自ら募金活動を展開し始めたのです。お母様がなくなられたお知らせと合わせて、すべての友人、知人に、唐丹への支援を訴えてくれたのです。それだけではなく、国際共通語エスペラント語を使ったフランスでの講演旅行では、7万円もの募金を集めてくださり、またフランスの子供の激励の絵まで集めてくださったのです。唐丹への教育支援活動を国際色に染めて下さった方は堀泰雄さんという方で、この人が日本エスペラント協会理事で、エスペラント語のエキスパートと知ったのはしばらくしてからでした。

[7] スウェーデンで出会った友人とキャロル・サックさん

桜美林大学准教授、長谷川(間瀬)恵美さんは、1997年12月に私が高校生を連れてスウェーデンを訪問したとき、ルンド大学教授オースル・ランデ氏の家で出会った方です。それ以来、京都に住む彼女の家を度々訪ね、交流を続けていました。そのような関係で募金の依頼文を送ったのですが、それが、12月13日に開かれる「一唐丹小中学生と支援者の集いー リラ・プレカリア(祈りのたて琴)とプレーヤーショール」という精神的支援の提案で戻って来ました。リラ・プレカリアは、日本ルーテル社団(JELA)が主催するハーブと歌で祈る音楽を提供するプログラムです。次が長谷川(間瀬)恵美さんからのメッセージです。

「演奏者キャロル・サック(Carol Sack)さんは、アメリカ福音ルーテル教会(ELCA)の宣教師です。彼女は心身の苦難にある人々にハーブと歌による生きた祈り(パストラル・ハーブ)を届けています。当日は、キャロルさんのハーブの演奏により、子供達の心を癒す時を持ちながら、海外から届いた支援の声をお伝えします。私達は、唐丹小中学校の子供達が、死という現実から目をそむけず、力強く生きて欲しいと願いつつ、穏やかな祈りをもって希望へと歩む手助けをさせていただきたいと考えております。」

この催しは、12月13日(火)、釜石市唐丹町の唐丹中学校体育館で開かれ、唐丹小中学生と父母、教職員、教育支援者が集いました。県外の支援者の参加もあり、感動的な会となりました。この行事がどのような結果を生むかはまだ未知ですが、支援金と共に心のケアの一助を担うことができました。

[8] EEC 唐丹希望基金立ち上げ

昨年 9 月上旬、上半期の「募金活動会計報告書」をホームページで公表しました。計画では毎月 130 万円を支援する予定でしたが、現在では 50 万円にとどまっていますので、この報告の中で、「年越しと正月だけでも、せめて晴れやかな気持ちで過ごしてもらいたいのので、いっそうの協力をお願いします」と、一歩踏み込んだ募金の協力をお願いしました。最近になって、その事をしっかり覚え、心配し、まるで遠くに離れて暮らしてる子供を心配してるような口調で、電話をかけて下さる方がいらっしゃるのです。

「もう少しで 12 月ですね。お正月もやがてやってきますので少し、多めにお金を送りますが、いつまで送ったらいいでしょうか？」

「12 月 13 日に父母が参加する行事がありますのでその時にお金を渡したいです。」

「わかりました。間に合うように送りますから、頑張って下さいね。」

この方のように、遠くにいてもひとときも目をそらさず、被災者を思い、唐丹を見守ってくださる方が、ほかにたくさんいらっしゃいます。この思いを必ず唐丹に届けたいと思いました。

募金活動も後半を迎え、この間、今まで考えたこともなかったたくさんの感動を経験しています。人は目に見えない心の奥に潜んでる清いものに引かれ、ときには求め、それらによってお互い繋がろうとしていることを知りました。若いときに聞いた「目に見えるものは一時的であるが、見えないものは永遠に続く」という言葉が頻りに頭に浮かび、それが妙に心地よく、自分に足りなかったものが少しずつ見えてくるような気がしてなりません。これからの社会は、心の奥にある人間の尊厳を守るため必要なことを土台にしたものでなければいけない、と原発事故も含め、強く思っています。

EEC 東日本大震災教育支援プロジェクトは 3 月 31 日で終了しました。

支援者数延べ 565 人、募金総額 8,649,003 円でした(ホームページで決算報告書公開)。

見ず知らずの私に皆様の尊い思いを募金という形で託して下さらなかつたら、自分一人の思いでは何も出来ませんでした。心から感謝申し上げます。そして、一年間本当にありがとうございました。

被災地は震災から一年経過した今、やっとかすかな復興の足音が聞こえるようになりましたが、多くの住民は仮設住宅を抜けようと必死にあがいても当分はその可能性が見えてこないのが現状です。そんな中、支援を断ち切ることは出来ないのが正直な気持ちなのです。

この一年間の支援活動で出会った方から「もう少し、唐丹の子供たちのために支援を続けていきましょう。」という声が、私の背中を強く押し、「やっぱり、継続しなければ」と決心しました。

「EEC 唐丹希望基金 2012」として新たに出発しました。

どの程度の支援が出来るかは未知の世界なのですが、「支援したい・・・。」「支援しなければいけない・・・。」という声が私の元に届く限り、続けるのが発起人の役目であると考えます。

どうぞ、今後も変わらぬご支援をお願いします。